

総 括

内 田 忠 賢

本分科会では、現代都市社会に見られる伝統と現代を扱った。特にハレの場面である祝祭に注目した。また、日本と海外の事例で国際比較を行った。そして、文化人類学、日本民俗学、人文地理学を横断する学際的な議論を試みた。

まず、スペインの地方都市で長期にわたるフィールドワークを行う竹中さん（神奈川大学）が報告した。スペイン北東部、ウエスカ市の伝統的な都市祝祭では、様々な場面で都市の歴史が顕在化する反面、ローカルかつ現在（同時代）的な背景により、祝祭が変容することを指摘した。竹中報告に対し、スペインの諸都市に精通した栗原助教授（本学文教育学部）が、コメントした。フランコ政権時代の地方政策や、現在進行しつつある地方復権運動など、政治的な側面により注目すべきこと、特に権力が空間を創り変えてゆくプロセスが興味深いことを指摘した。

次に、日本の地方都市で精力的にフィールドワークを行う中野さん（萩国際大学）が報告した。北九州の小倉祇園太鼓という都市祝祭が大きく変容してきたプロセスを詳細に紹介した。祭りでの開放性と閉鎖性の動態、さらに生活文化の動態が示された。

中野報告に対し、地域文化に関心を持つ内田（本学大学院人間文化研究科助教授）がコメントした。本分科会では、スペインと日本の地方都市における祝祭を扱ったが、ローカルな都市の歴史が背景として重要であること、祝祭の変容プロセスが都市生活文化の変容とリンクすることに注目したい。

フロアからは、歴史学や芸術学など様々な視点からの質問があり、都市祝祭が広がりのあるテーマであることを再確認できた。なお、時間が限られていることもあり、議論が消化不良であったことは否めないが、国際日本学のシンポジウムとして意義のある分科会だったと自負している。